

## 「形容詞対照語彙表」補遺

村田 菜穂子\*

### An addendum for “A Contrastive Lexical List of adjectives”

Nahoko Murata \*

#### Abstract

Until now as reference materials in order to know how often each adjective is used for in each work (use frequency), I have announced adjective contrastive vocabulary list of “the anthology of the eight poems”, “the prose work in ancient period” and “the documents written in Chinese with signs for rendering into Japanese” in my book “a study of the lexicography of an adjective / adjective verb”. And after that I have announced adjective contrastive vocabulary list of “Gunki-Monogatari (the war chronicle)” and “Konjaku Monogatari-Shu (the Tales of Times Now Past)” too.

But, now I found that I overlooked some adjectives by repeating various investigation. So, I enumerate those word examples as follows and show how often they are used for in each document.

#### キーワード

古代日本語 形容詞 対照語彙表 補遺

#### Keywords

ancient Japanese, *adjectives*, *contrastive vocabulary list*, addendum

#### I. はじめに

これまで、形容詞語彙における上代から中古への体系的な変化を探るべく、(イ)上代資料<sup>(注1)</sup>、(ロ)八代集<sup>(注2)</sup>、(ハ)中古散文作品<sup>(注3)</sup>において使用された形容詞を採取し、活用形式や語構成をはじめとするさまざまな観点から分析を行った結果を拙著『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』<sup>(注4)</sup>の別表一「古代語形容詞の語構成」としてまとめるとともに、(ロ)と(ハ)の資料から採取された形容詞の出現状況(使用頻度)を、別表二「八代集の形容詞対照語彙

---

\*むらた なほこ：大阪国際大学国際コミュニケーション学部准教授 (2009.10.6受理)

表」・別表三「中古散文作品の形容詞対照語彙表」に示した。また、古代日本語の一領域を担っている(二)訓点資料において使用された形容詞についても、中古形容詞を考察する上で調査対象として取り上げる必要があるが、訓点資料では、完全附訓の箇所以外の語形はすべて推定であり、訳読者の解読結果に左右される面が大きいということ、また、確例である完全附訓の語のみを採取しただけでは当該訓点資料の全体像を把握することができない等、訓点資料の語彙については八代集や中古散文作品の語彙と同様に使うには問題があるため、ひとまず措き、別表一～三とは分けて参考資料「訓点資料の形容詞の語構成」として示した。

また、上記の資料を公表した後、保元物語・平治物語・平家物語の(ホ)軍記物語三作品、さらに、(ヘ)今昔物語集にも調査を広げ、前稿(1)「軍記物語の形容詞対照語彙表」<sup>(注6)</sup>、前稿(2)「今昔物語集の形容詞対照語彙表―天竺・震旦部―」<sup>(注7)</sup>、前稿(3)「今昔物語集の形容詞対照語彙表―本朝仏法部―」<sup>(注8)</sup>、近稿「今昔物語集の形容詞対照語彙表―本朝世俗部―」<sup>(注9)</sup>を作成した。

そして、(ホ)(ヘ)から採取された形容詞が(イ)～(ニ)に存在する形容詞か否かを確認すべく、これらと前掲別表一・別表二・別表三および参考資料「訓点資料の形容詞の語構成」で掲げた形容詞とを照合したところ、(イ)～(ニ)からは採取されなかった形容詞がいくらか存在した。そこで、これらが(イ)～(ニ)には見えない新たな形容詞であるかを確認すべく改めて調査をしたところ、見落としていた形容詞が存すること、また、修正すべきものがあることがわかった。以下、それらの語例を挙げ、文献毎の使用頻度を示すとともに考察を加える。

## II.

まず、軍記物語を調査している中で、気づいた見落とし・修正すべき点を挙げる。

### 1 あわたたし

「あわたたし」は、前稿(1)では、上代資料・八代集・中古散文作品・訓点資料のいずれにも認められない、軍記物語における新出の形容詞と捉えていたが、改めて調査を行ったところ、次に示すように、見落としが認められた。

この侍る所は、いと騒がしう、宮たちもあはた、しうおはしまして、人繁ければ、ただいぬ宮一人を、かしこに渡して、仲忠が教へ奉るべきなり。

[宇津保物語・楼の上上]

「あわたたし」は、宇津保物語に上の例を含め4例見え、ほか、蜻蛉日記に1例・落窪物語に3例・源氏物語に17例・堤中納言物語に1例・夜の寝覚に1例・狭衣物語に2例・とりかへばや物語に2例見える。また、前稿(1)において、平家物語に2例認められる形容詞として掲げた形容詞であるが、1例と修正する。

### 2 こころあわたたし

薄き紫の色紙に書いて、梅の花につけて奉え給へるを、おとど、寄りて見給ひて、(中略)御返り、「昨夜は、『夜更けぬ』と、人々急がれしかば、こころあはた、しくてなむ。

[宇津保物語・蔵開下]

「こころあわたたし」については、上の例を含め宇津保物語に4例、蜻蛉日記に3例・落窪物語に1例・源氏物語に35例・夜の寝覚に2例・浜松中納言物語に6例・狭衣物語7例・とりかへばや物語に3例見える。

### 3 おびたし

「おびたし」は、前稿(1)にも示したように、保元物語に6例・平治物語に3例・平家物語28例使用されている。三作品計37例というのは、使用頻度から見て、(ホ)軍記物語で使用された形容詞の中では比較的高い方に位置づけられる。これに対して、中古資料では、次に挙げる宇津保物語の用例(1例)のほか、狭衣物語1例・大鏡に4例・讃岐典侍日記に4例・とりかへばや物語に2例、また、今昔物語集に10例と、平安後期以降の作品において使用が認められるが、その使用頻度は(ホ)ほど高い方に位置付けられるものではない。ちなみに、拙著で対象とした訓点資料にはその存在は認められなかった。

乱声、鼓・物の音、一度に、打ち、吹き、弾き合はせたり。<sup>(老)</sup>をびた、<sup>(た)</sup>しくめでたし。

[宇津保物語・吹上下]

### 4 かうばし

「かうばし」は「かぐはし」の変化した語で、平安時代に入ってから見えるようになった形容詞であり、上代資料では「かぐはし」<sup>(註10)</sup>という語形が用いられている。拙著の別表では、「かうばし」が「かぐはし」に関連付けられること、また、中古資料で両者が使用されている状況から、「かうばし」を「かぐはし」と併せて、両形容詞の使用頻度を「かぐはし」という見出し語で一括して示したが、今昔物語集や時代の下る軍記物語では「かぐはし」が見えず、「かうばし」が見えるのみであることから、「かぐはし」と「かうばし」とは別に扱うのが適切であろうと考え、両形容詞を一括せずに分けて扱うことにする。

よしある女になりければ、よくておこせてむと思ひたまひけるに、色などもいと清<sup>きよ</sup>らなる扇の、<sup>か</sup>香などもいとかうばしうておこせたる。 [大和物語]

なお、「かうばし」は、上の例を含めて大和物語に2例、宇津保物語に11例・落窪物語に5例・枕草子に1例・源氏物語に23例・浜松中納言物語に2例・更級日記に1例・狭衣物語3例、さらに、興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝に11例・神田本白氏文集に3例に見える。

### 5 さうなし

「さうなし」という語は、『日本国語大辞典第二版』では、一つは「①あれこれとためらわない。とやかいうまでもない。無造作である。容易である。②あれともこれとも決まらない。③⇒さうなし(双無)」という意味を表すもの(語義を示す漢字として「左右無」が当てられている)と、もう一つは「たぐいない。並ぶものがない。このうえない。すばらしくすぐれている。」という意味を表すもの(語義を示す漢字として「双無」が当てられている)の二項に分けて立項されている。

また、『古語大辞典』(小学館)「さうなし【左右無し】」の項(原田芳起氏)を見ると、「《左

右」は「とかく」の意①いずれともつかない。結着しない。②あれこれと考えないさま。見境なしだ。ひたむきだ。③かれこれ言うに及ばない。必定だ。④比類ない。随一だ。」とある。そして、「語誌」の解説では、「日記や記録などの変体漢文に、『とかく』を『左右』と書いたものが多い。それが音読の習慣を生じて『さうなし』を成立させたと推定される。(中略) 左右いずれともない無選択・唯一のさまを原義として、表現に応じて多義化する。④は通常『双無し』とされるが、派生義から推定された当て字で、別語とみるべきものではない。」と述べられている。たしかに、「さうなし」という形容詞は、優れている場合にしろ劣っている場合にしろ、基本的に「他と比べて隔たりが大きいさま」を表す形容詞と捉えるべきであり、原田氏の見方に従うのがよからう。

次に挙げる保元物語の例は、「有無を言わず。無造作に。」など、『日本国語大辞典第二版』で言うところの「左右無し」の意味を表す例であり、あとの平家物語の例は、「比類なくすぐれている」といった、いわゆる「双無し」の意味を表す例である。いずれにせよ、程度がはなはだしく大であるということを表している。

重貞が家子郎等を初めとして、所の住民等に至迄催集て、三百余人押寄て、  
 浴屋を四重五重に押し込み、其中にしたゝかの者十四五五人撰て、態太刀刀をば  
 持ず、浴屋の中へ乱入て、さうなく搦捕らむとす。 [保元物語]  
 為俊・盛重、童より千手丸・今犬丸とて、是等は左右なききり物にてぞありける。  
 [平家物語]

また、枕草子に次のような例がある。

輔尹は木工允にてぞ、蔵人にはなりたる。いみじく荒／＼しくうたてあれば、殿  
 上人、女房「あらはこそ」とつけたるを、歌に作りて、「左右なしの主、尾張人の  
 種にぞありける」とうたふは、尾張の兼時がむすめの腹なりけり。 [枕草子]

この例について、新日本古典文学大系では「さうなしの主」に対して「否諾（いやおう）なしの大將。『性なし』と仮名遣いに読む説もある。」という注があり、他方、新編日本古典文学全集では「さうなし」に対して「『左右なし』で、あれこれとためらわない、などの意か。一説、『双無し』で天下無双の意。」という注がある。また、この例は『古語大辞典』「さうなし」の②の用例として取り上げられている。

続いて、今昔物語集を調査している中で、気づいた見落としを挙げる。

## 6 まと(ど)ほし

「まと(ど)ほし」は、今昔物語集の本朝仏法部でその存在が確認できる形容詞である。

如此ノ多ノ堂舎ノ壁ヲ塗ルニ、国々ノ夫若千上集テ水ヲ汲ムニ、二三町ノ  
 程去タレバ間遠クシテ、壁ノ水不足ニシテ速ニ壁難成シ。 [今昔物語集・巻12-21]

そして、この語は上代資料、すなわち、万葉集にも存在する。ただし、上代では第二音節の「と」は、仮名書きされたもの(万葉集東歌 3441・3463・3522)が「等」または「登」と清音の仮名であることから、次の例も連濁していないと見るべきであろう。ちなみに、「名詞+形容詞」という同じ造語形式をとる「まちかし(間=近し)」もまた「末知可久」(万3524)と、上代では連濁していない。

児<sup>こ</sup>らが家道<sup>いへぢ</sup> 差間遠<sup>まとはほ</sup>焉（やや間遠<sup>まとはほ</sup>きを）ぬばたまの夜<sup>よ</sup>渡る月に<sup>きほ</sup>競<sup>きほ</sup>ひあへむかも

[万葉集 卷3・302]

この例から、「まとほし」は上代既存の形容詞ということになる。がしかし、今昔物語集を除けば、これまでに調査を行った、八代集・中古散文作品・訓点資料・軍記物語のいずれにもその存在が認められない。

他方、「まと(ど)ほし」には語幹を共通にする形容動詞「まと(ど)ほなり」が存在する。拙著別表四「中古散文作品の形容動詞対照語彙表」に示したように、「まと(ど)ほなり」は、大和物語に1例、宇津保物語に1例・和泉式部日記に1例・枕草子に2例・源氏物語に9例・堤中納言物語に1例・夜の寢覚に1例・浜松中納言物語に1例・狭衣物語5例・とりかへばや物語に2例と、中古散文作品には計24例使用されており、形容詞「まと(ど)ほし」よりも形容動詞形の方が優勢であった様相がうかがえる。

## 7 こよなし

「こよなし」は、今昔物語集本朝世俗部にその存在が確認できる形容詞である。

然レバ既<sup>おのお</sup>ニ各<sup>いくさ</sup>ノ軍ヲ儲<sup>まうけ</sup>テ可<sup>かふせんすべき</sup>合<sup>か</sup>戦<sup>か</sup>義<sup>か</sup>ニ成<sup>か</sup>ヌ。(中略)維<sup>か</sup>茂<sup>か</sup>ガ方<sup>か</sup>ニハ兵<sup>か</sup>三<sup>か</sup>千人<sup>か</sup>計<sup>か</sup>リ有<sup>か</sup>リ。諸<sup>か</sup>任<sup>か</sup>ガ方<sup>か</sup>ニハ千<sup>か</sup>余人<sup>か</sup>有<sup>か</sup>ケレバ、軍<sup>か</sup>ノ員<sup>か</sup>モコ<sup>か</sup>ヨナ<sup>か</sup>ク劣<sup>か</sup>タリ。

[今昔物語集・巻25-5]

この語が(イ)～(ニ)には見えない新たな形容詞であるかを確かめるべく改めて調査したところ、平中物語をはじめとして、中古散文作品に多数使用されている形容詞であることがわかった。見落としていた作品と出現数を挙げると、平中物語に1例、宇津保物語に43例・蜻蛉日記に1例・落窪物語に12例・和泉式部日記に1例・枕草子に7例・源氏物語に184例・紫式部日記に11例・堤中納言物語に2例・夜の寢覚に33例・浜松中納言物語に31例・更級日記に5例・狭衣物語51例・大鏡に6例・とりかへばや物語に29例、この形容詞が使用されている。平中物語をひとまず措けば、竹取物語・土佐日記・伊勢物語・大和物語・多武峯少将物語・篁物語といった古い作品には見えない形容詞で、形容詞・形容動詞語彙の新旧交替という変化が見えはじめる宇津保物語以降の作品で用いられるようになる形容詞であることは興味深い点である。また、「こよなし」は、讃岐典侍日記を除く宇津保物語以降のすべての作品で用いられ、さらに、今昔物語集では本朝世俗部だけで確認できることから、和文語としてその地位を確立し、広く用いられていた形容詞であると考えられよう。

また、この男、しのびたるものから、はやうまと思はぬ人の、まと思ひに思ひて<sup>す</sup>住<sup>す</sup>むぞありける。この男のすみけるあひだに、こよなうまさりたる人などに、もの<sup>きこ</sup>聞<sup>きこ</sup>こゆる気色<sup>けしき</sup>みえけり。 [平中物語]

## 8 さはりなし

「さはりなし」は、今昔物語集の天竺・震旦部および本朝仏法部に見えるほか、源氏物語に1例・高山寺本古往来に2例、その存在が確認できる。

「……命<sup>(源氏)</sup>長<sup>いのちなが</sup>くてなを位<sup>(ほ)</sup>高<sup>くらみ</sup>くなど見<sup>み</sup>なし給<sup>こ、のしな</sup>へ。さてこそ九<sup>かみ</sup>品<sup>さ</sup>の上<sup>さ</sup>にも障<sup>む</sup>りなく生まれ給<sup>のこ</sup>はめ。残<sup>(たまふ)</sup>るはわろきわざとなむ聞<sup>き</sup>く」など涙<sup>なみだ</sup>ぐみでの<sup>のこ</sup>給<sup>たまふ</sup>。

[源氏物語・夕顔]

新<sup>(シ)</sup>年<sup>(ネン)</sup>〔之〕後<sup>(ノチ)</sup>、禪<sup>(セン)</sup>下<sup>(カ)</sup>如何<sup>(イカ)</sup>ソ、抑<sup>(ソモ)</sup>、元<sup>(ゲン)</sup>正<sup>(シヤウ)</sup>〔之〕比<sup>(ヒ)</sup>ニ、殊<sup>(コト)</sup>  
 二障<sup>(サハリ)</sup>无<sup>(ナ)</sup>クは、中<sup>(チウ)</sup>堂<sup>(タウ)</sup>ニ参<sup>(マキ)</sup>ラムト欲<sup>(オモ)</sup>(フ) [高山寺本古往来32・288]

(イ)～(ニ)における出現状況や、今昔物語集では本朝世俗部には見えないことを併せて捉えると、漢文訓読系の語の色合いが強い。

### 9 さはりおほし

「さはりおほし」は、今回新たに今昔物語集に加えるべき語として取り上げる形容詞である。

仏<sup>(ブツ)</sup>ニ成<sup>(ナリ)</sup>ル道<sup>(ミチ)</sup>障<sup>(サハリ)</sup>多<sup>(オホシ)</sup>シ。心<sup>(ココロ)</sup>有<sup>(アリ)</sup>ラム人<sup>(ヒト)</sup>ハ此<sup>(ココ)</sup>ヲ聞<sup>(キ)</sup>テ可<sup>(タカ)</sup>悟<sup>(サト)</sup>シトナム語<sup>(ゴ)</sup>リ伝<sup>(ツタ)</sup>ヘタルトヤ。

[今昔物語集・卷3-(18)]

この語が(イ)～(ニ)および(ホ)に使用されていないかを再調査したが、その存在は認められなかった。また、万葉集に「さはりおほみ」という表現が存在する。ミ語法のものはこれまで対象としていないが、参考までに挙げておく。

港<sup>(みなと)</sup>入<sup>(い)</sup>リノ葦<sup>(わ)</sup>分<sup>(を)</sup>け小<sup>(こ)</sup>舟<sup>(ふね)</sup>障<sup>(サハリ)</sup>多<sup>(オホシ)</sup>見<sup>(ミ)</sup>我<sup>(わが)</sup>が思<sup>(おも)</sup>ふ君<sup>(きみ)</sup>に逢<sup>(あ)</sup>はぬころかも [万葉集 卷11・2745]

以下、訓点資料において見落としがあった形容詞を挙げる。

### 10 になし

謹<sup>(キンケン)</sup>言<sup>(ゲン)</sup>、夜<sup>(ヨ)</sup>部<sup>(ヘ)</sup>、或<sup>(アル)</sup>殿<sup>(トノ)</sup>原<sup>(ハラ)</sup>自<sup>(ヨリ)</sup>下<sup>(クタ)</sup>(シ)給<sup>(タマ)</sup>ヘル除<sup>(チ)</sup>目<sup>(モク)</sup>、御<sup>(コラム)</sup>覧<sup>(ヘ)</sup>ヲ経<sup>(タメ)</sup>ンカ為<sup>(タメ)</sup>ニ、  
 謹<sup>(ツ)</sup>〔ムテ〕以<sup>(モ)</sup>(テ)奉<sup>(ホウ)</sup>入<sup>(ニフ)</sup>、御<sup>(コシ)</sup>所<sup>(マウ)</sup>望<sup>(ウ)</sup>、相<sup>(アヒ)</sup>叶<sup>(カナ)</sup>ウ〔之〕由<sup>(ヨシ)</sup>、悦<sup>(ヨロコビ)</sup>(ヲ)為<sup>(ナ)</sup>(スコト)、  
 二<sup>(ニ)</sup>無<sup>(ナ)</sup>シ [高山寺本古往来9・63]

### 11 びんなし

風<sup>(カゼ)</sup>ニ扇<sup>(アフ)</sup>カ被<sup>(ル)</sup>、〔之〕草<sup>(クサ)</sup>ニ驚<sup>(ヲドロ)</sup>イテ、打<sup>(ウ)</sup>チ返<sup>(カヘ)</sup>(ス)〔之〕際<sup>(アヒタ)</sup>、乘<sup>(ノリ)</sup>人<sup>(ヒト)</sup>(ヲ)落<sup>(ヲト)</sup>ス  
 度<sup>(タビ)</sup>毎<sup>(コト)</sup>ニ、奉<sup>(ホウ)</sup>借<sup>(シヤク)</sup>ニ至<sup>(イタ)</sup>于<sup>(カ)</sup>(テ)ハ、反<sup>(カ)</sup> - 以<sup>(モ)</sup>(テ)便<sup>(ヒン)</sup>无<sup>(ナ)</sup>カル可<sup>(ヘ)</sup>シ

[高山寺本古往来29・270]

## Ⅲ.

以上、これまでに公表した「形容詞の対照語彙表」において見落とした形容詞の語例、文献毎の出現数とともに考察を加えた。参考までに、加筆修正した点(見出し語・出現数)を一覧表にまとめておく。なお、中古散文作品における「になし」「びんなし」については、すでに拙著の別表に挙げており、出現数に変更がないので「散文計」のみ示す。

「形容詞対照語彙表」補遺

追加する形容詞	漢字	上代	散文計	竹取	土佐	伊勢	平中	大和	多武峯	篁	宇津保	蜻蛉	落窪	和泉	枕	源氏	紫式部	堤	寝覚	浜松	更級	狭衣	大鏡	讃岐	とりかへ
1	あわたたし	慌		31							4	1	3			17		1	1			2			2
2	こころあわたたし	心慌		61							4	3	1			35			2	6		7			3
3	おびたし	夥		12							1											1	4	4	2
4	かうばし	香		48				2			11		5		1	23				2	1	3			
	かぐはし	香		3							3														
5	さうなし	左右無		1											1										
6	まと(ど)ほし	間遠	○	0																					
7	こよなし			417			1				43	1	12	1	7	184	11	2	33	31	5	51	6		29
8	さはりなし	障無		1												1									
9	さはりおほし	障多		0																					
10	になし	二無		90																					
11	びんなし	便無		212																					

追加する形容詞	漢字	今昔計	農日部	天竺部	仏法部	世俗部	軍記計	保元	平治	平家	八代計	古今	後撰	拾遺	後拾遺	金葉	詞花	千載	新古今	調点計	慈恩伝	白氏文集	古往来	
1	あわたたし	慌					1			1														
2	こころあわたたし	心慌																						
3	おびたし	夥	10				37	6	3	28														
4	かうばし	香	52	15	26	11	5	2		3											14	11	3	
	かぐはし	香																						
5	さうなし	左右無	3			3	21	4	1	16														
6	まと(ど)ほし	間遠	1																					
7	こよなし		1			1																		
8	さはりなし	障無	5	2	3																2			2
9	さはりおほし	障多	1	1																				
10	になし	二無																			2			2
11	びんなし	便無	26		9	17	1	1													1			1

【付記】

本稿は、日本学術振興会平成19 - 22年度科学研究費補助金（基盤研究（C））課題番号19520407）による研究成果の一部である。

注

注1 上代資料とは、万葉集(東歌・防人歌を除く)・古事記(仮名書き部分)・日本書紀(同)・風土記(同)・続日本紀宣命・祝詞を対象とした。そして、形容詞の認定は『時代別国語大辞典上代編』に挙がっている形容詞のうち、東歌・防人歌に使われている東国語方言の語や複合形容詞中のみその存在が確認される語は省くという基準によって拾い出した。

注2 古今集・後撰集・拾遺集・後拾遺集・金葉集・詞花集・千載集・新古今集

注3 中古散文作品とは次の22作品である。竹取物語・土佐日記・伊勢物語・平中物語・大和物語・多武峯少将物語・篁物語・宇津保物語・蜻蛉日記・落窪物語・和泉式部日記・枕草子・源氏物語・紫式部日

記・堤中納言物語・夜の寝覚・浜松中納言物語・更級日記・狭衣物語・大鏡・讃岐典侍日記・とりかへばや物語

注4 2005・11 和泉書院

注5 参考資料とした訓点資料とは、興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点・神田本白氏文集巻第三／四・高山寺本古往来である。なお、調査には『興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点の国語学的研究』築島裕氏(東京大学出版会)、『神田本白氏文集の研究』太田次男・小林芳規氏(勉誠社)、高山寺資料叢書2『高山寺古往来・表白集』(東京大学出版会)を用いた。

注6 『大阪国際大学紀要国際研究論叢』21-3[2008・3]

注7 『大阪国際大学紀要国際研究論叢』22-3[2009・3]

注8 『大阪国際大学紀要国際研究論叢』23-1[2009・10]

注9 『大阪国際大学紀要国際研究論叢』23-2[2010・1 発行予定]

注10 参考までに「かぐはし」の用例を挙げておく。

いざ子ども <sup>のびるつ</sup>野蒜摘みに <sup>ひるつ</sup>蒜摘みに <sup>わ ゆ</sup>我が行く道の <sup>はなたちばな</sup>迦具波斯 <sup>ほ え</sup>花 橘 は <sup>ほ え</sup>上つ枝は  
<sup>とりゐがら</sup>鳥居枯らし <sup>しづえ</sup>下枝は <sup>がち</sup>人取り枯らし…… [記応神・43]  
 東の中開けて、<sup>きんだち</sup>君 達、<sup>よ</sup>物見給ふ。<sup>れう</sup>夜さりの料に、<sup>か</sup>花作らる。いと多かり。香ぐはし。

[宇津保物語・嵯峨の院]

「かぐはし」は、この例を含め宇津保物語に3例存在する。

注11 拙著において、上代既存の形容詞と中古新出の形容詞の異なり語数の割合は、90年代後半の宇津保物語あたりを境に既存の形容詞と新出の形容詞の割合が逆転し、新出の語が既存の語を大きく上回るようになること(第三篇第一章)、また、形容動詞にもこれと同様の新旧交替現象がほぼ同時期に認められること(第三篇第二章)について指摘している。

注12 別表二で拾遺集(巻10・577)に1例あるとした「かぐはし」はミ語法であるので削除する。